

鍋奉行は  
妖狐の銀さん



著 ひーらぎ  
絵 杜崎ヨノモ

# 鍋奉行は妖狐の銀さん

文:ひーらぎ/表紙:杜崎ヨノモ

# キャラクター紹介

大坪縁（おおつぼ ゆかり） 男 二十歳

高校卒業と共に田舎から出てきたはいいが、大学受験に失敗したせいで現在浪人生活  
中……とは名ばかりの優柔不断なフリーター。

マスドネルドきつね街駅前店バイトマネージャー。

銀（ぎん） 女 外見年齢二十六程度

きつね街で祀られている狐の神様。

何より食べることが好きで、小さな食のこだわりが自分の中にある。

赤い和服に銀色の髪、女性なら誰もが羨むグラマーボディの持ち主。

櫛川千波（くしかわ ちなみ）女 十六歳

マスドネルドきつね街駅前店でバイトをしている高校一年生。

ちっちゃくしておつちよこちよいでバイト先のマスコットの女の子。

いつもミスしてばかりで助けてもらっている縁に想いを寄せているが、果たして彼女の恋が実る日は来るのか！？

実家は伏見銀条神社。

大貫和人（おおぬき かずと）男 二十歳

マスドネルドきつね街駅前店で働く大学生でバイトマネージャー。

金髪、無精ひげ、気怠げな顔と怖がられる要素の塊だが根は真面目で不器用な男。

タバコは赤マルポロ派。ビールはアサヒスーパードライ。

## プロローグ 【冬のはじめ】

大坪縁が神様と暮らし始めて二週間が過ぎようとしていた。

「銀さん、もうご飯できるから食器運んどいてー」

縁がコンロ上の土鍋へ意識を向けたまま、リビング兼寝室へ声を投げた。しかし返って来たのはバラエティ番組の大げさな笑い声だけ。

いや、よく聞くとその隙間から、

「了解じゃ……。じゃけど、あと五分だけ待ってはくれぬか……」

睡魔へ飲み込み変えの艶っぽい声がした。使うところを間違わなければどんな男も一声で魅了できそうなのに、なんともつたいないことか。きつと、宝の持ち腐れとはこのことを言うのだろう。

「銀さん？」

一向にやって来ない彼女へ溜息し、縁が両手で土鍋を持ちながらリビングへ入った。ベッドとコタツ、テレビとほとんど無駄な家具がない一室は隙間風入り放題なポロアパートに相応しい光景だった——コタツ布団から覗く、銀河へ雪を流したような色の髪と、灰が少しだけ混ざった獣耳を除けば……。

「五分もあれば、おれひとりで準備終わっちゃうって。ほら、起きてってば」

土鍋をテーブルへ置いてからコタツ布団を持ち上げると、

「よいではないか……：少しくらい」

髪色同様に白い肌へ乗った、充血やカラーコンタクトじゃ表せないであろうナチュラルな赤目と交差した。腕へ引つ掛けるように和服を着ているせいか、胸とかオパイイとか谷間のほくろとか、色々丸見えになっている。だが、もうすっかり慣れた日常の光景。そして彼女もまた見られているからといって恥ずかしがるようなこともせず、

「少しくらいよいではないか……。わしは神様じゃぞ？　すごいんじゃぞ？　偉いんじゃぞ？　お主よりずっとずっと歳上なんじゃぞ……？」

もぞもぞ、銀が縁へ背中を向けるように寝返りを打った。

「じゃあ銀さんは夜ご飯なしてことでいい感じかな」

呆れて溜息しか出てこず、縁がそっとコタツ布団から手を放した途端、

「……仕方あるまい。食器じゃな、少し待っておれ」

かなりゆっくりな動きで銀がコタツから出てきた。盛大に乱れて肌色大露出な和服を直そうともせず、これではただの事後にしか見えない——なんて口が裂けても言えず、

「よろしく、銀さん」

喉の奥で言葉を止めたまま苦笑を向ける。

「わしは神様じゃぞ……神に食器を運ばせるとは最近の人間は罰当たりじゃのお……まあよい。神は無礼な民にも寛容でないと務まらぬからな」

ブツブツ、キツチンから独り言が聞こえてきた。しかし言葉と裏腹に、和服のお尻部分からはみ出た、書き初め用の筆をずっと太くした灰色の毛の塊、しっぽが右へ左へゆらゆら動いている。

犬は楽しい時に尻尾を左右に振り回すが、狐の彼女も同じなのだろうか？

鍋奉行は妖狐の銀さん

縁はそんなことを頭の片隅で考えながら、ふと窓の外へ目を投げた。今にも雪が降りそうなの。空はあの日から引つ張ってきたみたいだ。

「そりゃ銀さんがコタツに潜るわけだよなあ……」

あの日、そう——銀さんと出会ったあの夜もこんな寒い日だった。

1 食目 【冬、二十歳フリーター。妖狐さんと出会う】

く雪も溶かすミルフィーユ鍋く

1

毎年冬になると、人に化けた狐が人里に下りてくる。そして、春になるまで人として暮らし、無事山へ帰れた年は作物の豊作が期待できる。

この街に暮らしている人間なら何度も聞いたことがある狐の伝説だ。もちろん、実際誰かが、

「狐に化けた人間を見た！」

なんて話があるわけでもなく——というか、この街やその周辺で狐を見ること自体かなり珍しいのだとか。

所詮は伝説、言われなければ思い出すこともない。それがこの街で暮らす人間の大半が思っていることなのだろう。

無論、大坪縁だってそうだ。

忘れられた伝説——二週間後に十二月を控える今日この日までは。

ただ毎日が同じ日常の繰り返しだった。



春も夏も秋も冬も——朝起きてバイトに行く。帰ったら一人で食事を作って一人で食べて、一人で片づけて。

なんでもいい、きつと刺激、新しい日常の何かを求めていたのだろう。  
仮面浪人という罪悪感さえ忘れられるなにかを……。

「……生き倒れってこの時代にあるんだ」

バイト先から自転車で十五分。駅前の雑踏が、夢か何かと思えるほどの静かな住宅地。木造平屋や古い建物が、最近の民家、コンビニと不器用に肩を並べる中に縁が暮らすおんぼろアパート『銀色荘』はある。そして、その一階一番手前101号室が縁の部屋だ。

この街に引越してもう三年になるうとしているが、女性の知り合いはバイト先の人間のみ。そして年齢は高校生が大半であり、何かの勧誘以外で女性がこの部屋を訪ねたことは一度もない——無論、和服の似合う銀髪美人もだ。

では、玄関扉へ寄り掛かってぐったりしたこの女性は……？

「だ、誰……てか、い、生きてる……よね？」

髪は丁度夜空の頂上で輝く月明かりみたいな銀色。誰も足を踏み入れていない雪原のような健康的に白い肌は『純白』という言葉が怖いほど綺麗に当てはまっていた。

「ん……ッ」

彼女の口元から絞り出したような吐息が聞こえ、縁がそつと顔を覆っていた銀髪を耳へ流してみる。眉間へ深いシワが寄っており、目尻が小刻みに震えていた。

「だ、大丈夫……？」

男なら誰もが目を奪われる胸元と一緒に和服から大きく露出された肩は声を上げそうなるほど冷え切っていた。とても人の肌を触つてるとは思えない。もう氷と同じだ。

「いつから居たんだろ……。涙……。？」

泣いていないとわかっているのに、縁は指先は彼女の目の下を指で確かめていた。そして縁の手へ呼応するように、

「んっ……」

色素を失った唇から細い吐息がもう一つ漏れた。

「お、おーい、だ、大丈夫ですかー？」

縁が何度か女性の身体を揺さぶると、

「ん……」

目を覚ましたのか、への字に結ばれていた彼女の唇がゆっくり持ち上がった。何かを訴えようとパクパク動き。

「……か……。った」

吐息の奥で何か言葉のようなものが聞こえた。

「だ、大丈夫！？ え、えっと救急車呼ぶから待ってて」

慌ててダウンジャケットを彼女へかけて、ポケットから携帯を手取る。

「……へっ……。のじゃ」

もう一度、切れ切れの音が後ろからした。振り返ると、

「え、えっ！？ あ、あの！？」

咄嗟の出来ごとに番号を打ち込んでいた携帯が足元へ転がった。ずっしり、彼女のボリユームーな胸がすぐ眼下へ迫っていたのだ。

「な、なにしてるの……?」

胸だけじゃない、首元あたりへ現実感のない銀髪がある。ずっと閉ざされていた瞼が持ち上がり、薄紅色の瞳がなにかを訴えかけようと縁へ向いていた。

「お腹……減ったの……じゃ……」

まさかこんな女性がそんな……お腹空いたって理由で倒れてるわけないよね。

寒さと現実感のない光景で耳がやらのれたに違いない、そうだ。そうに決まってる。

縁がなんとか自分を納得させようと精一杯の言い訳を心へ塗り重ねていると、

「お主……なにか食べ物を恵んでくれぬか……。礼ならする」

……どうやら聞き間違いないやなかったようです。

縁はゆっくり女性を身体から引き剥がして、

「と、とりあえず……うち入る?」

ドアノブを掴み、女性へ限りなく苦笑に近い笑みを向けてみた。間もなくして、銀髪の女性が控えめにこくりと頷いた。

「……さて、どうしてこうなったんだ」

縁は冷蔵庫から取り出した野菜をまな板脇へ並べてから自室を振り返った。引き戸の磨ガラスへは赤い和服がぼやけて映っている。テレビでも見てくれると気が紛れるのだが、聞こえてくるのは立て付けの悪い窓から吹き抜ける隙間風のみ。

「ど、どうしよう。え、えっと……き、嫌いなものとかないよね。というか、なにか出前とか頼むべきなのかな……ど、どうしよう」

二分の一サイズの白菜へ包丁を立てたはいいが、思うように力が入ってくれない。始めて自分の部屋に友達が遊びに来たのとは少し違う、ワクワク感と異様な緊張感は相手が女性だからだろうか？

それとも……。

「もしかして……今日おれは……」

ゴクリ、生温かい唾液が喉を抜けていった。

「礼はするって言ってたし……ま、まさか、な」

もしそんな輝かしい未来が待っているなら、やっぱりこんな部屋に居させていいわけがない。今すぐ駅前のそれっぽいホテルに向かったほうが——縁が半ば暴走寸前の脳みそをフル回転させていると、

「クシュッ」

鼻を吸る音が聞こえた。

「……何考えてるんだおれは」

包丁を持っていない手で頭をかき混ぜる。

こんな寒い日にあんな格好で生き倒れてたなんて、よほどのことがない限りありえることではない。このご時勢、犯罪だってありえるのだ。

なのにおれは自分のことしか考えないで——。

「あ、あの、寒い？」

少し大きめの声で銀色の彼女へ呼びかける。少し鼻を吸る音がしたと思えば、

「心配無用じゃ。わしなら平気じゃ」

「寒かったら暖房入れるから言ってね。この部屋ボロいからコタツただけだと寒いんだよ。

遠慮しなくていいからさ」

あはは、少しでも笑わせたくて大きめに言ってみる。しかし彼女の声は深い雪中へ埋もれたように聞こえてきてくれない。聞こえるのは自分でもいつから動かしているかわからない包丁の音。そして時折する名前も知らぬ彼女のくしゃみ。

「……すまぬな。お主はわしとは何も関係ないのに」

白菜を一口サイズより少し大きめにカットし終えた頃、その声はやってきた。

縁は一度浮かんできた言葉を飲み込んで包丁を置いた。

「よかつたらなんだけど」

リビングの隅っこにあるダンボールからみかんを幾つか取り出してテーブルへ並べた。膝を立てて座っていた女性が不思議そうに赤目を見開いて疑問に揺れる。

「ご飯、もう少しかかりそうだからよかつたら食べてよ。あとやっぱり寒いから暖房入れるね」

続いてエアコンのリモコンを操作、暖房を起動。じわじわ温かい空気がカーテンのようにリビングへゆらゆら広がっていく。

「……すまぬな」

「おれも寒かったからさ」

彼女の正面、テレビを後ろにして縁が炬燵へ足を入れた。靴下じゃ防ぎきれなかった冷気がじんわり解けていく。

「名前聞いてなかったよね。おれは大坪縁」

「名前……か。わしの……名前は」

一度タメを作るように口を閉ざした女性が目元へかかっていた銀髪を右へ流した。

「銀」

簡潔にそれだけが発せられる。真夏の夜に響く風鈴のような声色に思わず聞き入ってしま、

「どうかしたか？」

「あ、いや……銀」

思わず反応するのが少し遅れてしまった。

「銀さんって呼んでいい？」

「好きに呼ぶといい。わしは……縁、と呼ばせてもらう」

「いいよ。それで銀さん」

「なんじゃ？」

そうやって持ち上がった紅の瞳と交差し、縁は一瞬ではあるが自分の意識が彼女の中へ吸い込まれそうな気になってしまう。慌てて咳払いで視線を逸らしたのを誤魔化し、玄關の方をチラ見する。

「どうしてあんな格好で外にいたの……？　もしかしてだけど」

「そうじゃなあ。お主が何を考えているかくらいわしにも想像できる」

「じゃ、じゃあ……」

自分の脳裏に浮かんでいたのが的中したショックに縁の目がこたつ布団へ下りた。しかしやって来たのは、

「心配無用じゃ」

みかんの皮を剥く音と一緒にした溜息混じりの笑い声だった。

「お主の考えていることは何も起きておらぬ」

「……ほんとうに？」

「うむ。ただ……ここから先は少し説明が難しくくてな」

小粒のみかんを口へ放り込んでから、エアコンの風に揺れる蛍光灯の紐を見上げーテブルのみかんが無くなった頃、銀の視線が戻って来た。

「縁は……幽霊は信じるか？」

唐突な質問に、縁が片目を引き攣らせた。

「否定はしないかな」

「宇宙人は？」

「いてもおかしくないよね」

「ではそうじゃのお。ツチノコはいると思うか？」

「ツ、ツチノコ？」

「カッパは？」

「か、カッパ……？」

「ネッシーは？」

「ね、ネッシー？ え、えっと……」

何が言いたいんだ？

その後も都市伝説に登場する何かしらの名前が続くが、一向に銀が言おうとしていることの意味が一つとして理解できなかった。次第にネタも尽きたらしく、

「お主、中々見所のある人間じゃの」

「褒められてるのかな……？ それで、銀さんは……」

人間なんですか？

なんて疑問がどうして自分の中へ浮かんできたのだろうか？

縁は自分のしようとした質問に自分で首を傾げてから、改めて銀へ目をやった。正面の彼女は疑う余地もない、真正銘人間だというのに……。

「な、なんじゃ急に……？」

無意識に低くなつた声に怯えさせてしまったらしい。少し後ろへ下がった銀が両腕で胸を隠すように身体を抱いた。

「あつ、いや……その。変なこと聞くけど、銀さんって——」



我慢できずに失礼極まりない質問が唇へ触れた瞬間、俯き気味にこちらを見上げていた銀が頬を薄紅色に染めた。そしてそこから聞こえてきたのは、凜とした佇まい、現実感がない「幻想」のような彼女からは想像もつかない可愛らしいお腹の音。

「す、すまぬ……。えっとなんじゃったか？」

ううん、縁が空咳で誤魔化して腰を上げた。

「ご飯食べてからにしよつか。あの箱にみかん入ってるから食べて待つてて」

「す、すまぬ……。お主はいいやつじゃの」

「そう？」

「普通は見ず知らずの相手にここまでの親切はせぬぞ？ ま、まさか……。わしの身体目当てか！？」

再び後ろへ飛び跳ねて、今度は背中を向けられてしまう。縁が慌てて声を荒げる。

「ち、違うよ！！」

いや、一度はそんなドリームを胸に抱いたけども！！

「おれの家の前で倒れてたんだ。運命って言ったら変だけど、そんな気がしたから」

気恥かしさで小さくなった縁の声へ、銀がくすりと口辺を緩ませた。

「……不思議な考え方をするな、お主は」

「褒め言葉として受け取っておくよ」

そう縁がキツチンへ戻る。が、すぐに顔だけをリビングへ覗かせて、

「あの……。今更で悪いんだけど、シャワー浴びる？」

「……よいか？」

「その格好じゃ嫌でしょ？ 汚れてるし……」

「そこまでしてもらわなくてよいのじゃが……そうじゃの」

腕を広げて自分の身体を確認した銀が、

「借りてもよいか……？」

「うん、お風呂はその扉ね。トイレはその隣ね」

玄関のそばにある二つ並びのドアを指差した。

「すまぬ。なんじゃ……ここまで親切にしてもらったのじゃ……」

風呂場の引き戸を手にした銀が足を止めた。既に夕食の準備に戻ろうとしていた縁が包丁を片手に彼女の背中へ目をやる。

「銀さん……？」

「い、いや……なんでもないぞ。ありがとう、と言いたかっただけじゃ」

言った銀が逃げるように風呂場へ入っていった。

彼女の思いつめたような声とその意味が気になったが、和服の衣擦れやシャワー音に縁の意識はものの見事に攫われてしまう。精一杯の抵抗として、まな板の脇へ並べた具材に包丁を入れようとしたのだが、

「……ほ、本当に勧めちゃったけど、変なことしてないよね。だ、大丈夫……昨日風呂掃除したし、汚くないはず。で、でも……。いや、でもってなんだよ！」

湯気の奥の楽園を想像してしまい、ちっとも手が動いてくれない。

「いや、落ち着けよ。銀さんは……お客さんだし。とにかく今は料理だろ料理！！ そう  
いうことは料理ができたら考えろって！」

煩惱を振り払うように、豚バラへ無駄に力の籠った包丁が下りた。ほぼ一口サイズに切り揃えたら下準備は完了だ。というか、もう七割近く完成した状態と言ってもいい。

二口コンロの一つを塞ぐ一人暮らしが使うには大きめの土鍋へ、先に切っていた白菜、と豚肉をミルフィーユ状に内側からぐるりと並べて、具材の三分の一ほどが浸かるまで水投入。そこへダシ用に昆布を浮かべて、沸騰するまでそのまま放置、準備オツケー。

つまりやることなくなつてしまった、ということだ。

「いや、いやいや。ダメだつて、銀さんはお客さんなんだから。で、でも……」

いつの間にか風呂の扉へ向いていた視線を慌てて鍋へ戻す。ゆらゆら踊るコンロの炎でも見ていれば心も落ち着くはずだ。

だが、友達以外、それも女性が自分の家の風呂を使うのは初めてのこと。そして彼女なんていた経験すらない自分には……。

すぐ扉を開ければ、服からはみ出していた色んなものがフルオープンでシャワーに打たれているわけだ。鼻歌なんか歌っちゃって……。

無意識に喉が揺れる。自分の内側にある緊張に身体が熱くなる。

「き、着替え！　そう、着替えがないとダメだよね。銀さんの服汚れてたし！！」

明白すぎる言い訳を口に、リビングのダンスへ走った。

「な、何なら平気かな……」

彼女のあのたわわな胸が収まる服なんて……。

あの飛び込みたくなるたわわな胸でも着れる服なんて……。

破壊力抜群のたわわなおっぱいが一番強調される服なんて……。

徐々に服探しの理由が変わっていることに気づかぬまま、縁が手にしたものは、「こ、これだ！」

窓際でハンガーに揺られていたもの。

そう、白ワイシャツ。

選ばれたのは白ワイシャツでした！

「だ、だって前空いてる方が収まるとか気にしなくていいし……？ 定番、お約束は守らないとだよね、うん」

だってそこにワイシャツがあつたのだから。無ければ他の選択をしたのだ。なんて言い訳を自分の中で繰り返しながら縁が風呂場の扉をノック。

「ぎ、銀さんっ……！」

『なんじゃ？』

シャワーの音が止まり、水を蹴るような音と一緒に籠もり気味な声が返ってきた。それだけで余計緊張感が高まり声が裏返ってしまう。

「あ、あの着替え……持ってきたから。入って平気？」

『すまぬのお。少し待ってくれぬか』

それからしばらくして、

「縁、着替えのことじゃがのお」

扉が横にスライドしたのだが、

「あ、あれ……？」

「……やはりわしはこの服の方が落ち着くと思うのじゃが……よいか？」

「い、いや……」

縁は片手にあつたワイシャツを背中へ隠した。バスタオルで髪を拭う銀が着ているのは先程と全く同じ赤い着物だ。しかも何故か汚れが綺麗になくなっていくじゃないか。

「ぎ、着替えは？」

「これか？ 下着は無理じゃったが、着物の方は何とかなつてな」

「あ、あの……着替えあるけど？」

「わしはこの方が落ち着くのじゃ」

「ならいいんだけど……」

髪を伝った雫が大きく開かれた谷間へ吸い込まれ、つい目がいつてしまう。慌てて別の方向へ視線を逃がしたのだが、

「縁……どうかしたか？」

「い、いや……」

だが、抵抗虚しく縁の視線は光に吸い寄せられる虫のように、用もなく銀の方を見てしまう。悲しい男の性、宿命、運命だ。

色つぼく火照った肌がそうさせるのか、形と一緒に柔らかさまでがわかってしまう大露出の中、ちらりと薄ピンクの突起がひとつ、ふたつ。

まさか……！？

「ぎ、銀さん……下着、は……」

「ん？ 洗濯に出したぞ」

「せ、洗濯……！！？」

「汚れておったからの……まずかったか？」

きよとんと首を傾げる銀へ縁が口辺を引き攣らせた。

つまり彼女は完全ノーガード状態というわけだ。

腕へ掛かる着物を引つ張り下ろせば、男なら誰もが一生のうち一度は憧れ、夢見る地上最高の場所。桃源郷が待っていることになる。

「縁？」

「えっ、ああ、ご、ごめん。いや、いいんだ……銀さんがいいなら」

むしろウエルカムですから！！

縁が内心ガツツポーズしていると、

「そうではない」

ツンツンとつつかれ、

「あれのことじゃ」

銀の指差す方へ首を回してみると——グツグツ鍋が泡を吹いた。急いでコンロの火を切り、ふきんを手に土鍋の蓋を持ち上げてみる。

ふわっとよく煮込まれた白菜の甘い香りが漂ってきた。豚肉にもきちんと火が通っており、透明のだし汁へキラキラの肉汁が染み出ている。そこへ、醤油、塩、チューブ生姜で味を整えて完成だ。

「できたのか？」

「お待たせ、ご飯にしようか」

「うむ、待っておったぞ！」

「やはりお主は変わっておるの」

「そうかな？」

豚肉と白菜を適当によそった器を両手で受け取った銀に口元だけで苦笑を作る。

「いただきます」、両手を合わせた銀が箸を右手にした。箸の間でとろける白菜が口へ運ばれる。身内にも振舞ったことがない手料理に緊張する中、銀は感想を口にしないで、更に何口か箸を進めてみせた。

「ど、どう？ 鍋だから失敗とかないと思うけど」

そう聞かずにはいられない、なんとも不思議な沈黙だった。

そうじゃのお、グラスのお茶へ口をつけた銀が器の上へ箸を並べた。緊張感を思わせる彼女の空気に縁の身体が強ばった。

「縁……お主中々やるのお」

「ほ、ほんと？」

一重気味の両目を緩ませた顔に縁が安堵の息を漏らす。

うむ、そう領いた銀が再び白菜を口へ運んだ。

「箸で触っただけで染み出る薄味のダシが素材本来の味を引き出し……舌の上でしつとりとろけていく。かと思えば、これは豚肉じゃな」

白菜を飲み込んで間もない口へ吸い込まれていく。

「噛めば噛むほどダシと生姜の香りがふわっと広がって……。肉の力強い食感も相まって飲み込むのが惜しいほどじゃ」

「そ、そこまで言われるとは思ってなかったけど……。ん、薄味？」

「ほぼ万点であろう感想に頬を緩ませたが、一つ引つかかることが。しかし縁がそれを指摘するよりも早く、

「お主の家も前で倒れて正解だったかもしれないな」

冗談っぽい笑い声がやってくる。鍋の熱気に当てられたのか、彼女の頬は雪原に桜の花びらを散らしたように薄色が乗っていた。

「銀さん暑い？」

「ん、そうじゃの。身体の中からポカポカして……。とてもよい感じじゃ。この鍋も味がしつこくないからいくらでも食べられてしまうぞ」

「ああ、よかったらなんだけど……」

縁は少し言いにくそうに、彼女のの前へポン酢とごまダレのボトルを並べた。不思議そうにそれらを見ていた銀が、

「なんじゃこれは？」

始めてな子供顔で首を斜めにされる。

「ポン酢だけど……。えつ、知らない？」

まさかそんなことって……。

服装といい話し方といい、かなり古風な感じではあるが、だからといって現代に生きる上でかなりメジャーな調味料を知らないなんてこと……。ありえるのか？



「こんなものがあつたとはな。うむ、試してみようかの」

「う、うん。少し酸っぱいから気を付けて」

嘘とも思えないし……ポン酢も知らないって銀さん、本当にどこから来たんだ？

縁

「ほお、これが……。香りは中々じゃな」

銀の方から柑橘類の中でレモンと肩を並べる清涼感、柚子の香りがやってきた。意識を引き戻された縁が顔を上げると、

「ポン酢と申したか。いざ……！」

薄黒く染まつた白菜が銀の口へ吸い込まれていくところだった。

そして、

「わしの人生とは……なんじゃつたのかのお」

喉を揺らした銀の口からふわりと白い吐息が登った。満足げに細められた瞳からは想像もできない小さな声の直後、

「こやつ存在を知らずに鍋を食べていたわしが恥ずかしいわ。白菜の甘さを引き締める酸味と……これはレモン？ 違うのお、柚子か？ ダシの風味と重なって口へ広がる様は芸術じゃ」

「そ、そう……なの？」

「生姜の香りと喧嘩せず見事に溶け合っておる。お主が勧めるのも納得じゃ」

「ゴマも試すよね。ならこれ使つて」

「すまぬな」

さて、縁から新しい器を受け取った銀。興味深く容器を見つめながらごまダレを注ぎ、「なるほど。甘塩っぱい香りがなんとも……ゴマのほのかな香りもまたいい感じじゃ。トロツとしてるのも具材に絡んで」

ごまダレをくぐらせた白菜をお口にIN。しばらく無言の咀嚼が続き、立て続けに今度は豚肉にタレを絡めて口へ運んだ。なるほど、銀の口角がゆったり持ち上がる。

「鍋料理、ここまで奥が深いものとは思わなかったぞ。ポン酢とごまダレ、まさかこの二つが料理を劇的に変えてくれるとは……恐れ入った！」

「大げさじゃないかな」

「そんなことはないぞ」

興奮気味な銀が自分の前へポン酢とごまダレの容器を並べ、

「野菜を中心に食べるならばポン酢じゃ。野菜本来の甘みを程よい酸味が引き立てておるからのお。ツンと爽やかに鼻を抜けていく様はそよ風じゃ。しかしごまダレ、此奴も中々の仕事人じゃ」

ごまダレのキャップへ白い指が這い、花を愛でるような艶かしい動きで底の方までしっかりと撫で上げる。こつん、悪戯な彼女の指がごまダレのキャップをつついた。

「此奴は肉を食す時に真価が発揮されるものじゃ。濃厚な甘みとゴマの風味は肉の臭さを消し、野性的な食感、肉感だけを残すように絡んできおる」

お茶で口を濯いだ銀が、ふうと吐息する。それまで正座を崩した、いわゆる女の子座りだったが、気が抜けたのか足が伸びてきた。縁の脛辺りをちよこんと触れた素足の感触がなくなった頃、

「お主、独り身なのか？」

「えっ、な、なに急に!？」

「こんなに料理がうまいのじゃ、恋仲のものくらいおるじやろ？」

「……いたらいんどね」

縁がささくれた溜息と共に窓ガラスへ視線を逃がした。

「今の今まで恋人とかいたことないよ。それがどうかした？」

「うむ……慣れておる、と思ったからのお」

「慣れてる……？」

「見ず知らずのものを家へ上げたり、夕食を共にしたり……普通は家にも上げぬぞ？」

銀が身体を支えるよう、後ろへ手をつけて座り直した。

「まあ普通は警察とか呼ぶだろうけど。なんでだろうね」

よくわからないや、縁が不気味用に目元だけで笑って箸を手にし直した。

丁度よく火が通って確かな重みを持った豚肉をゴマだれで頂く。淡白な肉の食感を楽しんでいるうちに、胃袋までを芳ばしいゴマの香りが一息で駆け抜けていく。

ビールで流し込みたい衝動に駆られるが、今は客人の前だ。自分へ強く言い聞かせて、

同じ麦でも全く味が違うものを一口。

「こつちこそ、もつといい物を出せればよかつたんだけど……」

「わしはこれで満足じゃ。お主の手料理ならなんでも美味しいじやろうからな」

空になった銀の器へ新たに具材をよそってやる。

汗も拭わず箸を動かす姿をぼんやり眺めていると、

「ん、わしの顔に何か付いておるか？」

「えっ？」

「ニヤニヤと……なんじゃ、言うてみよ」

「いや、なんでもないんだ。ごめん」

自分の部屋で友達でも身内でもない、完全な他人が当たり前に夜ご飯を食べている。その事実がくすぐったくて、心の奥が雲に乗ったようにふわふわして、ただ楽しい——なんて思うのはきつと変なことなのだろう。

きつと銀の言っていることは正しいのかもしれない。

縁はふと彼女の言葉を思い出してくすりと口元を綻ばせた。

「まだおかわりあるから沢山食べてよ」

「悪いの。縁の料理は美味しいからつい箸が進んでしまうわ」

「一人暮らしだからね。自炊しないと食費が大変なことになるし」

「わしが世話になった者共は——いや、なんでもない。忘れてくれ」

何か言いかけた銀へ縁の箸が魔法にかかったように動きを止めた。

「銀さん？」

呼びかけにも応じずに、俯いた銀色の横顔。あれだけ楽しそうだった箸が今は悲しそうに白菜へ触れたままだ。

「……お主の目的はなのじゃ？」

唐突にやってきた言葉の意味がわからず、縁は次ぐ予定だった言葉を詰まらせた。  
「も、目的……？ 目的って？」

「わしを……わしを助けた目的じゃ」

「そ、そんな……」

縁が動揺を隠しきれない息遣いで、彼女の顔を覗き込んだ。綺麗に見開かれていた赤い双眸は銀色の闇に飲み込まれて隙間も見えてくれない。

「答えてくれぬか……？ 縁、お主のような善意の塊のような人間がいることはわかっておる。だが、わしの前に現れるなぞ……そんな都合よく物事が進むとは思えぬのじゃ」  
湖の表面を覆う氷の膜へヒビが入ったような声が入ってきた。

「別に目的なんて何もないよ」

「本当か……？」

「うん。ただ……」

「ただ、なんじゃ？」

「えっと……」

こういふの、なんて言葉にすればいいのか……。

視界の端へ銀を捉えたまま、器へ目を下ろす。モヤモヤというより脇腹をくすぐられていけるような、なのに嫌じゃない感覚の正体を知りたくて、そつと目を閉じてみる。

カチコチ時計の音とエアコンの無機質に温風を吐き出す音が続き、

「質問に答えてくれぬか。わしはお主を信用したいのじゃ」

鍋へ手をつけることなく、こちらをじっと見据えていた。

「えっと……」

ただ直視されているだけなのに、赤い瞳から彼女の中にある自分の知らない不安や恐怖が伝わってくるようだった。嘘も冗談も誤魔化しも許されない——真実だけしか口にできない瞬間。縁はその緊張感に唾を飲み込んだ。

「本当に理由なんてないよ」

「嘘じゃ」

「嘘じゃない。たまたまおれの家の前に倒れてたから。それだけ」

「嘘じゃ」

「どうして嘘だってわかるのさ」

「そんなの……」

——嘘以外あるわけなからう。

銀の声があまりにも小さくて、本当にそう言ったかは縁にもわからなかった。ただ、彼女の唇が僅かにその音を立てた気がしたのだ。

「なんで銀さんがおれの家の前に倒れてたとか、過去に何があったとかわからないけど、おれは嘘をついているように見える？」

「……わたしにはどれも同じ人間にしか見えぬ」

「……いつだってそうじゃ——」。

銀はそう口にした。まるで自分が人間じゃないような——とても寂しげな声。

エアコンがついているはずなのに、縁の背筋は吹雪に晒されたように凍えていた。なのに握り拳には汗が滲んでいた。

「……どうということ？」

「全て話そう。それを知つてなお、わしを信じさせることができるか見ものじゃ」

カラカラ挑発めいた笑みの銀。しかしその自嘲とも取れる笑顔の中で瞬間的に覗かせた「孤独」を縁は見逃さなかつた。

座りを正し、

「いいよ、信じさせる。」

「よかろう」

お茶で唇を濡らした銀がゆっくり言葉を紡ぎ始めた。

3

「わしの生まれた山奥はな、冬になると食べ物は何もなくなるのじゃ。ちよいとした事情で離れることもできぬ、もう何年も山で暮らしておつた。そして冬になると、食べ物を求めてここに下りてくるのじゃ」

銀が一息にそう切り出す。

「山奥……？」

「この街から見える山があるじゃろ、わしの家はそこにある。冬の間だけわしは他の人間に食べ物を分けてもらつておるのじゃ」

毎年冬になると食べ物を求めて人里へ下りてくる——どこかで聞いた気がしないでもない話だった。

縁が握り拳を顎へ当てて、頭の片隅から該当しそうなエピソードを検索してみる。しかしイマイチうまくヒットしてくれない。

「……毎回食べ物を与えてくれる人間は見つかる。中には冬の間、寝床も提供してくれる人間も中にはおつてな」

ここまでは銀の警戒心を深くさせた出来事があるとは思えない。しかし裏腹に、縁の胸に妙なざわつきが広がりだし、ノイズみたいな音が鼓膜付近を刺激していた。

「そ、それで……」

「うむ……世の中ギブアンドテイクというものじゃ。金も何もないわしができることといえば……」

當時を思い出しているのか、銀の眉間へ険しくシワが刻まれた。

綺麗だった赤目は怒りに燃えてるように見えて、ただただ怖い。が、その怒りも長いこと続かず、次第に臉が降りていき、静かな恐怖として縁の背筋を震わせた。

「わしに差し出せるものは……自身しかなかった、というわけじゃ」

話の結末を足底でごみを踏み潰すかのように吐き捨てた。

「わしにはお主もあの者たちと同じにしか見えぬのじゃ……。すまぬ……」

「ふざけてる……」

「ふざけてなどない。わしは冬の間生きていける、あの者たちは自分の欲を吐き出せた。

お互い様ではないか」

「そうじゃない……そうじゃないよ」

声の震えを抑えて、そう口にするのが精一杯だった。



縁のしゃくり声に銀が顔を上げかけた。縁と目があつた途端、何かを言おうとしていた唇が音もなく閉じてしまう。逆に縁は言いたいことは沢山あるのに喉元で留まる空気の塊で何も言えないでいた。

「お主は……お主はなぜ泣くのじゃ」

乾いた笑い声に縁が大きく咳き込んで立ち上がった。

「約束する、おれは銀さんに何もしないから」

「どうしてわしじゃなくてお主が泣くのじゃ」

「う、うるさい。いいだろ、別に」

服の袖で涙を拭う。

「とにかく、おれは銀さんにそんな酷い事とかしないから。おれだけは何があつても銀さんに酷いことはしない。そんなの……人として間違つてるから」

「人として、か……ではそうじゃの」

残りのお茶を飲み終わつた銀がゆっくりこたつから立ち上がった。

こたつが暑かつたのか、少しはだけてしっとり吸い付きそうな太ももがチラリと着物の丈から覗いていた。シワの寄つた生地を払って直すや、

「わしが人じゃなかつたら……話は変わるのではないか？」

「人じゃない……？」

「一体何を言つてるんだ？」

「そうじゃ、見ておれ」

こちらを見据える赤い両目がより鮮明に、より濃く色を持ったかと思えば次の瞬間、

「縁、わしはお主を信じたいぞ」

縋るような声が隙間風とは違う、どこからか吹き出した嵐のような防風に隠された。

「うっ、なにこれ」

急な風に腕を目元まで持ち上げてやり過ぎす。しかし、あまりの強風に目を開けることが難しく、何が起きているのか把握することはできなかった。

「これがわしじゃ」

直後、ドロンと白い煙が銀の立っていた場所へ巻き上がって、

「ぎ、銀さん……？」

そこにはつい先程まで一緒に鍋をつついていた赤い着物の女性、銀は跡形もなくなっていた。代わりに

「これでもわしが人間と言えるか？」

髪だけだと思っていた銀色が全身を覆った獣が四足で立っていた。細長く尖った顔はどう頑張っても人と呼ぶことはできない。犬や猫ともまた違った独特なフォルム、それぞれ個別で動く九本の尾に耳。

例えるならそう、

「き、狐……」

尻尾の数、毛の色を無視した上で一番近い生き物はまさに狐だ。

「え、えっと……えっ、えっ……？」

たった今起きたことの処理が追いつかず、縁は何度も目を瞬かせた。何かの手品とも思えないし、

「縁？」

こうしてこの狐から銀の声だつて聞こえてくる。

「あ、あの……銀さん、なんだよね？」

「うむ、ちゃんと見ていたじゃろ」

「見てたけど……でも、えっ……あ、あの」

「お主もこの街に暮らしておるのじゃ。一度はこの街の伝説は聞いたことあるじゃろ」

動揺でわたわた喘いでいた縁へ銀の微妙に冷めた目が向いた。動物園で見るときのより随分生き生きした感じに、縁の思考が水を浴びたように冷静になつていく。

「この街の伝説……？」

「きつね伝説——わしは昔からこの街で祀られているきつねの神じゃ」

「狐の……か、神？ か、神様つてこと？」

こくん、ふわつふわの銀毛を揺らして頷いたかと思えば、

「まあ人間界ではこつちの格好でいることが多いがお」

ドロン、再び煙が上がり——今度は狐がいなくなり、和服の胸元を直す銀が現れる。し

かし、先程の狐が確かに『居た』と主張するように銀と色がグラデーションになった狐耳とふさふさのしっぽが一本炬燵布団へ乗っていた。

もうますますパニックである。

「ど、どういうこと……？ えっ、ど、ドッキリ？ 確かにおれの家の前で倒れてるあた

りから嘘みたいなノリではあつたけど……」

銀さんが神様？ もしかして化かされてるの？ 狐だけに。

やはり彼女の言葉がうまく自分の中へ馴染んでくれず、縁は這うようにフローリングを歩いて、

「なんじゃ？」

「ちよつと現実とは思えなくて……」

恐る恐る指先でふよふよ左右へ動くしつぽをつついてみる。たんぽぽの綿毛へ触れたような感触が指に優しい。つい面白くて、銀の？ しつぽを指で遊んでしまう。

「んっ……」

温っぽい吐息と共に尻尾が縁から逃げていった。それを追いかけて、今度は膝の上へ乗せてブラッシングのように指を通してみる。

「すごい……もふもふ。えっ、なにこれ……すごいんだけど」

「じゃ、じゃから……縁よ」

片手の指を口元へ運んで、声を抑えようと目を閉じる銀。よく見ると白い頬が熱つぽく桜色に染まっているじゃないか。

「……お主わかっててやっておるのか？ それとも無知なだけなのか？」

「わかって……えっ、無知？」

首を捻りながら、今度は両手にその尻尾を抱いてみる。羽毛を直に触るとこんな感触なのだろうか？ 文字通り羽みたいな軽さなのに、しつかり彼女の体温が伝わってくる。心地よさに目を閉じたら眠ってしまいそうだ。

「試しに頬擦りしてみると、

「んんっ」

銀の背中が伸び上がった。同時に意志を持ったように尻尾も固さを帯びて、一本一本の毛が刺のように縁の頬へ突き刺さる。しかし、撫で続けると元の柔らかさへ戻り、

「ゆ、縁、い、いい加減にッ……!」

足を震わせて膝をついた銀が上品さの欠片もない顔でこちらを睨みつけた。よく見ると両目も涙へ濡れ、少し前までシリアスモードを語っていた瞳とは思えない。

「は、恥を知れ、この下変態が!」

くるりと翻した尻尾で縁の頬をビンタ。

「尻尾を無闇やたらと触るではない! お主は出会って間もない女の身体を愛撫する趣味があったのか……お、お主だって同じではないか!」

尖った双眸がキツく吊り上がったのを見て、縁はその場へ正座した。じっとフローリーングを見つめるが、

「なにが信用させてみせるじゃ、お主も同じじゃ」

鼻で一蹴した銀へ縁が両目を固く閉じる。

「ごめん……」

「謝って済むものか。わしが人間じゃないと分かっただらこれじゃ」

「そ、それは違うよ!」

「ほお?」

何もかも諦め、全てを遠ざけて拒絶とするような赤目は下衆を見下すそれと同じな気がした。今にも目を逸らしてしまいたい緊張感に口の中が干上がっていく。

咳き込みそうな渴きを押し殺して、

「耳が生えてるとか、尻尾があるとか……確かに興味本位で触りはしたけど、だからって拒絶したり遠ざけたり、何してもいいとか思っていないよ。おれと少しだけ外見が違うだけの人間だよ、銀さんは」

「言うのお。ではどう潔白を証明する？ お主があの方たちと違うとどう説明する？」

「……そ、それは」

口壁を噛みながら縁が再び俯いた。

銀が縁へ距離を取るように立ち上がり、

「……言えぬか。なら、わしは去るのみじや、夕飯、助かったぞ」

それだけ言い残した銀髪が明かりの灯っていないキッチンへ消えていった。草履を履く音が聞こえる。間もなく蝶番が縁と銀に再開を知らぬ別れを知らせるのだろう。

しかし、

「待ってよ」

それじゃダメだ……ここで引き止めないと多分後悔する。ずっと、ずっと。縁が慌てて立ち上がった。和服の袖を掴み、

「証明になるかはわからないけど……」

「なんじや、もうよいだろ」

「それじゃ……おれがよくない。やつと……誰かと」

ずっと胸のあたりに感じていたこそばゆさの原因がわかったのだ。

嫌悪感を顔にする銀の両肩を掴んでこちらを向かせ、

「おれはただ誰かと一緒にご飯を食べたかっただけなんだよ」

「嘘をつくならもう少しマシなものを付くべきじゃ」

「この部屋に引越してから……今まで自分の料理を食べてくれる人なんていなかったら。いつもこの部屋にはおれしかいなくて」

——空っぽだった。

この街に来て三年。その間ずっと感じていた物足りなさ。

きつとそれは自分が浪人生と名乗っていないながら予備校にも通わず、ただバイトしてその日を怠惰に生きている罪悪感からくるもの、そう勝手に思っていた。

「銀さんのこと何も知らないし、神様って言われてもイマイチ信じられないけど……後悔はしたくない。だから……」

でもはつきりわかったのだ。

「お主は本当に変わっておるな」

縁の頬を銀の微笑が撫でた。

「いや、ただのお人好しというやつかもしれない。お主はわしに欲情せぬのか？」

「しないよ」

「お、お主なあ……。一応わしは女ぞ？」

どうも微妙な表情をされ、縁が難しく首を捻る。

しばらく目が合ったのかと思えば、

「まあよい。神に向かって欲情なぞ、罰当たりにもほどがあるからな」

困り顔の銀が溜息した。

「わしと飯が食べたかったから助けた……なんともおかしな男じや。もう少し賢く生きれば良いものを……しかし縁、お主を信じよう。そこで一つ頼みがあるのじやが……」

「うん、おれもなんだよ」

にこり、口辺をそう結んだ銀がこちらへ身体を回した。そして、

「冬の間、おれと一緒にご飯を食べてくれない？」

「冬の間、わしにお主の料理を食べさせてくれぬか？」

二人の声が重なった。

それは、永遠に忘れることのできない冬が雪もなく始まりを告げた瞬間だった。人と神、決して交わることのない者同士のたった数ヶ月の奇妙な関係が――。



鍋奉行は妖狐の銀さん

『鍋奉行は妖狐の銀さん』は C91 冬コミで販売！

『よろづ屋本舗』

C91 コミックマーケット

2 日目 12/30(金) 西 1 ホール の - 08a

ひーらぎ著作の C90 既刊も販売予定！

※新刊をお買い上げの方に**豪華特典の妖狐の銀さん鍋敷きが付属！**既刊と同時購入で割引もあります！

# 鍋奉行は妖狐の銀さん

発行者 よろづ屋本舗  
<http://yorodukatudousi.dou-jin.com>  
[yoroduyahonpo@gmail.com](mailto:yoroduyahonpo@gmail.com)

著者名 ひーらぎ (@rag0311)  
<https://twitter.com/rag0311>

イラスト 杜崎ヨノモ  
編集 黒ねこ作 (@gretelproject)  
<https://twitter.com/gretelproject>

これはサンプルです。完全版ではありません。

本書の著作権は著者にあり、著者に無断で本書の内容の一部または全部を無断で複製(コピー)することを禁止します。

また、この作品はフィクションであり、実在する個人、団体とは一切関係ありません。